写真で見る昭和の横浜④
横浜市長公舎―「都市外交」の拠点

【写真】市長公舎における国立モスクワ合唱団の歓迎行事　1963（昭和38）年6月8日

広報課写真資料　横浜市史資料室所蔵

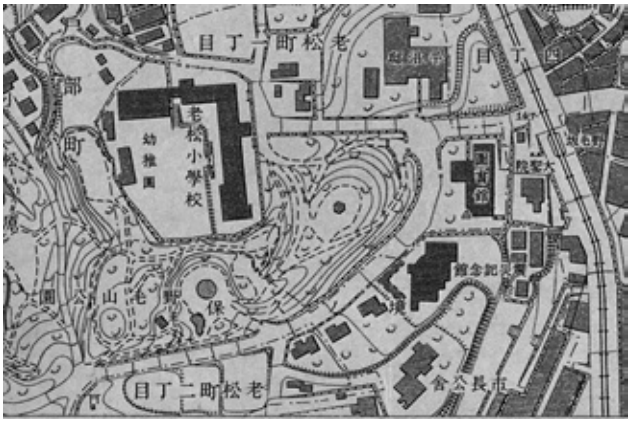
飛鳥田一雄市長時代の一九六三（昭和三八）年六月八日、ソ連・国立モスクワ合唱団の歓迎パーティーが野毛山の市長公舎において催された。【写真】はその時の一コマである。大勢の来賓の前で日本の伝統芸能が披露されている。こうしたガーデンパーティーが度々実施されるなど、市長公舎は市内外の要人・団体を歓待する「都市外交」の拠点であった。

現市長公舎は一九二三（大正一二）年九月の関東大震災によって焼失した旧市長公舎の代替として計画され、一九二七（昭和二）年五月一〇日に野毛山の中腹に完成した。設計は横浜市建築課で、担当したのは同課技手の坂本信太郎であった。坂本は同僚技師の鳥海他郎の指導を受けつつ、建物を設計し、実際の施工は独自の鉄筋コンクリート工法で知られる中村建築研究所に委ねられた。

市長公舎の建坪は約二四六坪で、社交用の洋館（コンクリート造二階）と日常生活用の日本館（木造平屋）に大きく分かれていた。【写真】には、来賓の後方に洋館（右側）と日本館（左側）の二つが確認できる。しかし老朽化のため、後者は一九八八（昭和六三）年に解体され、イベント用の集会施設に変わった。また、敷地内には、かつて助役や秘書課長の公舎も存在したが、現在、それらの建物は残っていない。

さて、最初に市長公舎の主となったのは、一九二五（大正一四）年五月に就任した有吉忠一市長であった。有吉は公舎完成から約二週間後の五月二七日に南太田の仮住居から引っ越してきた。そして、六月二日に大横浜建設記念式に出席する秩父宮雍仁親王が市長公舎を訪問して以降、市長公舎は時代の変化とともに、横浜を訪れる多くの要人・団体を迎え入れてきた。

そうした「都市外交」の拠点であった市長公舎は、「昭和の横浜」の生き証人として現在も野毛の丘から横浜の成長を見守っている。



【図】昭和戦前期の野毛山（1931年8月測図、横浜市土木局）
三千分一地形図「新港町」（1932年）　横浜市中央図書館所蔵

【参考文献】『横浜貿易新報』／『横浜復興誌』（横浜市役所、一九三七年）吉田鋼市『ヨコハマ建築嘉情』（鹿島出版会、一九九一年）、『都市の記憶―横浜の近代建築Ⅰ』（横浜市歴史的資産調査会、一九九一年）

（吉田律人）